

# 永遠の杜

## 伝説 うねめ物語とささやき橋（耳詰橋）

今からおよそ千数百年前、奈良時代のころのお話です。当時、「平城京」と呼ばれた奈良の都は、大変にぎわっていました。その都から、天皇の命令を受けた葛城王の一行が安積の里（今の郡山）に、見回りにやって来ました。



安積の里では、ここ3年に渡る冷害による不作で、年貢米が滞っていました。王はとても機嫌が悪かったので、国司の館で歓迎の夕食会を開きましたが、王の機嫌は直りません。

そのうちに、王も酒のよいがまわり、調子もでてきて、

「じつは今日、この里に入る時とつぜん強風が吹き、わしのところにこんな美女の絵姿が舞い込んだ。この娘の顔は里の者だろう。探してここへ連れてまいれ」と命じました。召し出されたのは、春姫でした。姫は王の前へ進み出て、お酒をそそぎ、

「安積山 影さえ見ゆる山の井の 浅き心をわが思わなく」と歌をよみました。

この歌の意味は、「どうしてご機嫌が悪いのですか。安積山のふもとに山の井の清水があります。安積山の影を水面に写し、浅い井戸のように思われますが、どうしてどうしてとても深い清水です。それと同じで、私たちが王をお慕いしている気持ちは、とても深いものです。どうか機嫌を直して下さい。」という意味です。和歌にすぐれた王は、教養がある美人の出現にすっかり喜ばれ、年貢米の免除も聞き入れてもらうことができました。しかし、王は、

「そのかわり、春姫をうねめとして都につれてまいる。」と、申されました。うねめとは、天皇の日常の世話をする女官のことです。春姫には愛する夫がいましたが、年貢のことで里のためにことわることはとてもできません。夫の悲しみは計り知れないほど深いものでした。

里人の犠牲となって都に上る春姫を、里人達も大勢里はずれの橋のたもとまで見送りに来ました。別れを惜しむ夫と春姫は、橋の上で何やらささやきあいましたが、まわりの里人には聞こえませんでした。それ以来、人々はこの橋を「ささやき橋（耳詰橋）」、川を「音無川」と呼ぶようになりました。

春姫は都で天皇につかえ、はなやかな暮らしはできましたが、里に残った夫のことは片時も忘れられません。中秋の名月の夜、猿沢の池で宴が開かれた時のことです。春姫は急な腹痛をよそおい、近所の家に休ませてもらい、夜のふけるのを待ちました。

その家を抜け出した春姫は、うねめの衣装を池のほとりの柳にかけ、はきものをそろえ、いかにも入水したとみせかけて、ひそかに都を抜け出すことに成功しました。

当時、奈良の都から安積の里までは、男の足でも60日といわれていました。いくら夫が恋しい、里が恋しいとはいっても、たいへんな旅であったと思います。

しかし、春姫がわが家に帰ってみると夫の姿が見あたりません。もう春姫はこの里には戻ってこないと思い込み、山の井の清水に身を投げて死んでしまっていたのでした。

春姫は、山の井の清水へ急いでむかいました。しゃがみこみ、水面を見ているとなつかしい夫の顔がうかんできて、「早くこい」と手をさしのべているようです。春姫は、思わずわれを忘れて清水に飛び込んでしまいました。

初冬の水面に浮かんだ丸い水の輪が、だんだんと小さくなりもとの静けさに戻りました。

年が明けた春、山の井の清水のほとりに、小さな花がいっぱい咲きました。里人たちは、春姫と夫の生まれ代わりだといって「安積の花かつみ」と名づけました。

この悲しい伝説・うねめ物語は、万葉集第16巻の安積うねめの歌物語が原点となっています。――現在の東部幹線の笹原川にかかる「ささやき橋（耳詰橋）」のたもとにあった由緒ある松が、昭和51年1月19日に永盛小学校校門わきに移植された『ささやきの松』です。――